

シラチャ校だより

泰日協会学校
シラチャ校

2010, 7, 1



5年生「ジャンタプリー-臨海学校」を振り返って (6月3日~5日 ジャンタプリーにて)

「楽しく、仲良く、思い出に残る最高の臨海学校にしよう。」が今回の臨海学校のテーマでした。シラチャ日本人学校は日本全国そして、世界の各地域から子どもたちが集まっています。その仲間たちと一緒に、一生に一度の行事である臨海学校を成功させようという思いで、子どもたちと準備を進めてきました。思い起こせば、私自身、小学校の卒業文集に林間学校での出来事を記した経験があります。内容は恥ずかしいものでしたが...

思い出に残る臨海学校にするために、どのようなことができれば、この臨海学校が成功だったと言えるのか。そのことについて、子どもたちとよく話し合いました。「臨海学校までに遠泳の練習を一生懸命取り組んだ!」や、「友達と協力してビーチゲームやキャンプファイヤーの企画について工夫を重ねたぞ!」。こんな気持ちを持って本番に臨めば、きっと子どもたちは、持ち前のパワーを発揮してがんばってくれるにちがいない。そして、臨海学校でがんばれたことが思い出や感動という財産になるのだと考えました。

そして、迎えた当日。普段の学校生活では絶対にすることのできないビーチでの活動が始まりました。一生懸命に、本当に楽しそうに、という言葉がびっтарりの生き生きとした取り組みをする姿が見られます。具体的には、子どものアイデアから生まれた「砂うめゲーム」というものがありました。仲間を一人ずつ、砂の中に埋めていきます。埋められる人はもちろん、埋める人も声をかけ合いながら、砂をかけていきます。一人ひとりが埋まっていく様子を見ることは、お腹を抱えるくらい楽しいものでした。



2日目は、遠泳がありました。遠泳を迎える前に、学校のプールで練習を重ねてきました。自分と一緒に泳ぐパディの仲間を大切にしました。200メートルから徐々に距離を長くしていき、臨海学校の1週間前には、ついに目標の1000メートルを泳ぎ切りました。ちなみに、練習で泳いだ距離は10000メートルに及びます。当日はクラゲをさけながらの遠泳となりましたが、練習の成果を発揮し泳ぎ切ったことが子どもたちの思い出に残りました。

臨海学校の最後の活動は、キャンプファイヤーです。キャンプファイヤーは「燃えるよ燃える」を歌ったり、みんなでジンギスカンの曲に合わせてダンスをしたりしました。子どもたちの代表が、振り付けを決めて、みんなで練習をしてきたものです。代表の子に合わせて振り付きダンスをするのは、心が解放されて、子ども同士の気持ちをつなげる機会となりました。その後は雰囲気を変えて、みんなで家族への感謝の手紙を読んでいきました。2日間家族と離れて生活していて、寂しさも感じていました。そんななか、自分が悲しかったり、くやしかったりしたときに親が励ましてくれたり、支えてくれたりしたエピソードを精一杯語っていきました。つらかったことや感謝の思いで感動し、泣きながら手紙を読んでいきました。涙ながらに語る姿を見て、我々教員も胸を打たれました。

今回の臨海学校を通して子どもたちは多くのことを学ぶことができたことと確信しています。遠泳に向けての体力と耐力、キャンプファイヤーやビーチゲームを通しての友達との協力、親や教員、コーチ、リゾートの方への感謝、活動を一生懸命に取り組んだことによる達成感と充実感などです。テーマの「思い出に残る最高の臨海学校にしよう」は、子どもたちのがんばりによって見事に達成されました。

今年度の臨海学校は、昨年度のアヒンから場所が変わり、ジャンタプリーで実施されました。臨海学校を成功させるため、場所の選定からはじまり、半年以上もかけて入念に準備を進めるなど、多くの方の協力があったため実現できたものです。子どもたちのために、学校内外の方のチームワークによって実施できたものです。5年担任として、協力をしていただいた全ての方に感謝申し上げます、終わりと致します。

(5年担任 成田 潤一)



シラチャ校開校事始め

前シラチャライオン日本人会長の西田純敏氏が転勤のため、このシラチャを去られることになった。

氏は、私たちのシラチャ日本人学校新設のため、お仕事のかたわら東奔西走、たくさんの人々の力をまとめ上げ、開校を成し遂げてくださった人だ。

今回は、氏の功績を偲ぶため、本校開校の経緯を改めて振り返ってみたい。

※

このシラチャ地区に日本人が住むようになったのは今から10年ほど前からのことようだ。シラチャの隣にあるレムチャバン港が、アジアでも有数の港として発展し、その周辺に多くの工業団地が造成されたのが、その大元の理由だ。

今から9年前には、土曜日に国語と算数を教えるシラチャ・パタヤ補習授業校が現地校を借用して開校している。子どもは30人ほど。この開校も、当時の日本人会長さんのご尽力と聞いている。

この地区に、全日制の日本人学校を創りたいという話が持ち上がったのは、今から4年前のこと。その年の日本人会(CRJA)の総会で、日本人学校を創る運動を開始する、という決議がなされた。

その時の日本人会長が、西田純敏氏だった。

※

西田氏はその後、たくさんの人に会って日本人学校設立の話をし、助言と協力を求めて各方面を回られた。

物事を進める時はいつもそうだが、その運動の趣旨に全員が賛成ということは滅多にない。また、趣旨は理解するが、そのためにお金を出したり、汗を流したりすることまではしたくないという、いわゆる傍観者の人だっただけだ。

西田氏にとっては、このところが一番難しかったのではないかと、私は思う。反対する人を説得するにはエネルギーがいる。非協力的な

雰囲気を感じた後には、いっそう頑張るって心を奮立たせなければならなかったに違いない。

事実、当時の補習校保護者の中には、学校を創るのは良いことだと思うが、学校ができて私たちが子どもを行かせないと思う、とアンケートに答えた人がたくさんいた。英語の勉強も継続させたいし、日本人学校に行かせてもすぐ帰国することになりそうだ、というのがその理由だった。

日本人会の会員である各企業からも不景気の影響で、寄付金を出しにくいという意見も出た。

西田氏は、その辺りのことについては多くを語らないけれど、私が西田氏のご苦勞を偲ぶ時に第一に思い起こすのは、その難しいところを乗り越えて前へ進んでいただいたという事についてだ。

※

学校を創る運動の初期段階では、そうしたご苦勞があったが、西田氏のご尽力の甲斐あって、やがてこの運動には、バンコク商工会議所や泰日協会学校(バンコク日本人学校)理事会という、組織だった大きな協力者が現れ、新校の設立は急速に現実味を帯びるようになった。

新校開校のためには、①建設費用調達のために、会員各企業の寄付を募ること。②日本政府に学校設立を認可してもらい建設費の一部補助や教員派遣等の援助をいただくこと。③タイにおける正式な学校とするためにタイ教育省の認可を得ること。

④校舎建設を地元チョンブリ県に認可してもらうこと。⑤建設地選定と建設業者の選定、そして校舎の設計と工事の発注。

⑥開校に備えての教職員確保や、設備・備品の調達。その他、多岐にわたる仕事がある。本校設立は、これらの仕事を、本業の傍らこなして下さった多くの方々の奉仕活動に支えられた結果だ。

かつて補習校の教務主任だった人が立派にできあがった校舎を見て、私に、「日本企業の力はさすがですね」と語ったことがあるが、その裏には、当地日本人会を始め、泰日協会学校理事会の皆さんや、バンコク商工会議所の皆さんの持つ人脈にもさすがと思わせるものがあつたと私は思う。

※

西田氏は、本校開校と同時に日本人会長を退かれたし、学校設立準備委員会も役目を終え、その委員長も退かれた。

私たちのシラチャ日本人学校を創ろうと誰が言い出し、そして、誰がどのように心労を重ね、誰がお金を持ち寄り、どんな人が汗を流してこの学校は開設されたのか。

年を経れば人も入れ替わる。遠からずして、それらのことは人々の意識には上らなくなり、有って当たり前前の学校となっていくだろう。

※

海外にある日本人学校や日本語補習授業校は、その全てが地域の人たちの協力で創られたものだ。後から来た私たちが、このことによって受けている恩恵は実に大きい。

先日、アパートのエレベーターの中で、「お陰様で子どもが喜んで日本人学校に通っております。」と、あるお父さんにご挨拶をいただいた。そう言ってくれれば、私も大変嬉しい気持ちになるが、西田氏がもし、そこにいれば、私と同じ思いだったろう、と思う。

また、私達、今学校に集う者がなすべきことへのヒントがそこに有るようには私は思う。皆さんに、「この学校があつて良かった」と思ってもらえるような学校を作ること。皆が自然に学校の存在に感謝するようになること。そのことが、西田氏始め学校設立にご尽力いただいた方々の思いを引き継ぐ有力な方法と、今、思っている。

(校長)